

雲南護國軍について

——起義の主體と運動の性質——

寺 廣 映 雄

まえがき

雲南護國軍起義は一九一五年十二月廿六日、第三革命として、又倒袁運動として始まつたことは周知の通りである。然しながら、この起事が一體何時、何處で、誰によつて計畫されたかという點を取り上げて、從來極めて曖昧であつて立ち入つて考察されたものがみられなかつた。勿論、之には資料の不足という事情もあるが、近年に及んで漸次新資料の収集も行われ、この方面に關する研究もみられる様になつたが、まだ緒についたばかりである。⁽¹⁾又我國に於ても、當時として相當大きな關心を呼んだ事件として、吉野作造博士や波多野乾一氏等によつていち早く問題とされたにもかかわらず、その後、絶えて之に關する研究の發展

がなかつた様である。従つてこの運動の史實や意義について必ずしも正當な解釋や評價が與えられなかつた憾みがある。この運動が辛亥革命や第二革命に較べて、その占める意義について今までそれ程關心が拂われなかつたという點については、次の様な主な理由が考えられるのではなからうか。

先ず第一に、この運動が第一・第二革命につづいて第三革命と呼ばれながら、この兩者との間に如何なる政治的・精神的關連性或は發展が存在するかという點について明確にされていなかつたことである。第二に、この運動に於て大きな役割——或る場合に於ては蔭の主導者とも云われる——を果した人物が、中國民主革命の主流的存在であつた孫文乃至國民黨と、政治的・思想的に全く對立する嘗つて

の保皇黨の領袖梁啓超であり、且つ又、この運動と深い關係を持つ蔡鍔が彼の門下生であつたことである。第三に、この運動が近代中國の革命的地盤であつた湖南・湖北・浙江或は廣東の地から全く隔絶し、勿論、その様な革命の傳統が全然皆無と思われる雲南に於て突如として勃發したことである。

凡そ以上の様な諸點が明らかにされない限り、この運動がいくら倒袁・共和護持の爲であると稱しても、一面に於て辛亥革命から脱離或は孤立したものであるとする考え方を否定し去ることは出来ないのではあるまいか。この運動に關する詳細な資料は入手困難ではあるが、可能な範圍に於て、此等の諸點を中心にして若干の考えを述べてみたい。

一 梁啓超・蔡鍔との關係

起義に至る迄の經過を先ず梁啓超の記事、即ち「盾鼻集」⁽¹⁾「護國之役回顧談」⁽²⁾「國體戰爭躬歷談」⁽³⁾等を足掛りにして考えてみよう。一九一四年末、袁世凱の帝制運動が次第に露骨化すると共に、梁啓超及蔡鍔は袁との關係を斷絶する必要を痛感し、更に翌年八月十五日籌安會の宣言書が發表さ

れ、その二日目に梁・蔡の兩者は第三者某を交えて湯化龍の寓處に會して密かに討袁の議を謀つた。即ち國民黨員は既に第二革命後、海外に亡命し、國內の軍人・政治家又總て袁によつて買収されている今日、我々が討袁の責に當らなければ、民國は此の時を以て終りを告げなければならぬ。而して討袁の爲の唯一の實力は蔡鍔が雲南・貴州に於て經營した軍事力を措いて他にない、という意見に一致した。蔡鍔は日本陸軍士官學校を卒業して雲南に入るや、南方各省の軍事教育に専心し、遂に雲南・貴州に於て抜くべからざる勢力を扶植していたが、第二革命に際して中立の態度に終始したことは却つて袁の猜疑するところとなり、當時彼は北京に招致され袁の監視下に置かれていたのである。然しながら一方、この計畫を實施するに當つての第一の困難は、蔡鍔が雲南に歸つて舊部下を集結するには既に時間的餘裕がなく、且つ又、その間には必ず機密の漏洩によつて事前に發覺する公算が多い。そこで彼等兩人は先ず同志を雲貴兩省に派遣すると共に、一方電報によつて意中の者を呼び寄せることにした。かくて十月中に貴州巡按使戴戡が入り、彼を交えた三者が天津に於て數次の會談を遂

げ、後に發動された種々の軍事計畫は實にこの時に決定されたと述べている。更に戴戡と共に北京に入つた貴州人王伯群をして、蔡の密函を以て昆明に向け出發せしめた。一方、之と併行して梁と蔡は外面を偽裝する爲、兩者全く別行動をとつた。即ち梁啓超は天津に於て有名なる論文「異哉所謂國體問題者」を彼の門下生の經營する北京「ガゼット紙」上に掲げた。實に九月四日のことであり、之に引續いて「國體問題與外交」等の論文を發表した彼は、一轉して之より共和維持派の理論的指導者たるの地位を得た。之に對して蔡鏐はその師梁啓超を攻撃する態度に出て全く帝制賛成の風を裝うた。然し十一月に入るや、蔡鏐は病氣療養の爲と稱して張孝准を伴つて同月十九日突如として日本に向つた。彼が去つて十日後、梁は大連より轉じて十二月十八日上海に到つた。之より遅れること一日、日本に於て巧に袁の眼を欺いた蔡鏐は、香港・河内を経て密かに雲南に入つた。(十二月十九日) 而してその數日後の廿三日、第三革命の端となつた帝制取消要求の電文が雲南都督唐繼堯・巡按使任可澄・蔡鏐・戴戡等の連名を以て發せられ、續いて第二電は袁の回答を廿四時間内に迫つた。更に廿六日正

午を以て愈々唐繼堯の名に於て雲南獨立を宣したのである。以上は、この運動に深い關係を持つに至つた梁啓超の記述として、又最も早く發表されたものとして、蔡鏐の劇的な行動と相俟つて、普遍化され通説とされてきた起事の發端の概略である。

然しながら一歩進めて考えるならば、梁啓超のこの様な記述には多くの不十分な點、或いは疑問の個所が存在することに氣付くのである。先ず第一に彼等の反袁の計畫が籌安會發生直後からなされ、又その軍事的計畫が十月中に天津に於て決定されて居り、これは時期的にみて極めて早いと思われるが、然しその様な軍事計畫と、雲南軍界との具體的・實際的な關係並に蔡鏐が雲南に入つてから起事に到る迄の行動、或は事情等の肝心の點については殆んど觸れられていないのである。⁽⁴⁾ 然るに通説では梁啓超のこれだけの記事を基として、十九日に入滇した蔡鏐がその軍事計畫を雲南將領に告げて彼等の同意を得、初めて起事に至つたと解釋されている。然し之は後にも觸れる如く常識から考へても時間的にみて極めて不自然であるという外はない。又、梁啓超は護國軍に於て、自分の優秀なる門下生である

蔡鏗を主動者とすることによつて、自己の地位を高めんが爲に、他の倒衰勢力——特に舊國民黨系の活動についても殆んど無視しているのである。之れは勿論、その政治的立場の相違に依るとはいえ、甚だしく主觀的傾向を帯びているものといわねばならない。

此等の疑問の諸點を明らかにしなければ、梁啓超・蔡鏗を以て護國軍起義の主動者とする従來の通説をそのまま受け入れることは出来ないし、又ひいてはこの運動の性質を正しく把えることは不可能であらう。

二 起義の主体

梁啓超のこの様な記事に對して、一方この起義の計畫が全く雲南軍界の獨立的・自働的なものとする記録が存する。即ち護國軍第一軍總司令部秘書長であつた李白垓の記すところによれば次の通りである。⁽⁵⁾

「雲南に於ては、初めより革命主義者が文武官衙の主要部を占め、表面は出来る丈け中央に對して恭順の風を装いつつ、實は機會を俟つて革命の大旗を翻えそうとして居つたのである。これが愈々籌安會の發生によつて、

かねて機會を覘つていた革命主義者の幹部連中は愈々動き始めた。そろそろ獨立の密議が擬らされる様になつたのは十月の末つ方である。而して専ら之に與つたものは、雲南將軍府部内の要職に居つた羅佩金・黃毓成・趙又新・鄧太中・楊秦・呂志伊・李白垓等の諸氏である。……かくて雲南獨立の議は十一月の初めにもう既に立派に決定して居つたのである。」

國國民黨史稿」及び「史略」⁽⁶⁾

「中華革命黨の成立後、孫文は雲南の同志呂志伊を日本より雲南に返し、軍隊に働きかけて之を蜂起せしめる任務を與えた。(この點については注釋を要する。後述) 省の將校たる鄧太中・楊秦・黃毓成・羅佩金・趙復祥・劉雲峯・申學如・李白垓・趙仲・謝樹瓊等は全く討袁に共鳴し、且つその中の數名は革命黨の舊同志であつたので呂志伊の活動は極めて成功を収めた。……彼は此等雲南に於ける革命に共鳴する將校達を集めて秘密會議を開き、四項の辦法、即ち、(一)唐繼堯如反對帝制。則仍推其爲領袖。(二)唐中立。則以禮送其出境。(三)如唐附和帝制。

則殺之。(四)如實行二三兩項。則擁羅佩金爲領袖。を決定した。かくて一同は鄧太中・楊秦の兩名を推して、唐繼堯の眞意を探らせた結果、唐も討袁に参加することが判り、次いで九月十一日に第一次秘密會議、更に十月七日と十一月三日の兩日、第二次・第三次の秘密會議を開き舉兵時の作戰を練つた。この時恰も李烈鈞・熊克武・方聲濤らが陸續として、雲南に來て之に参加したので、更に第四次秘密會議を開いて、一六年元旦袁登極の日に舉兵を實行することに決定した。ところが適々電報によつて蔡鏜・戴戡らの雲南に到達することを知つた爲に、その計畫を數日延期することになつた。」

李根源「護國軍始末記」⁽⁷⁾

「蔡、十二月二十日を以て雲南に抵る。至らば則ち衆志已に定り、遂に二十五日に獨立を宣布す。雲南の獨立は純粹に自働となす。蓋し羅佩金・黃毓成・李白垓・趙復祥・鄧太中・楊秦・呂志伊・李臨陽・趙伸の諸君、皆主持して最も力むる者にして、唐繼堯は實にその成功を總べるものなり。外間の傳説にして雲南の獨立は被動に出るものとなすは、殊に當日の事實と合わず。」

潛廣(當時駐滇記者)「雲南共和軍紀實」

「籌安會興るに及んで、袁氏の謀叛を決心するを知る。是に於て滇省の軍人、將軍より中下軍官に至るまで共に黃毓成の家中に集り、密議すること數次、皆一致して討袁を決す。居中の主持、羅佩金・黃毓成・鄧太中・楊秦・趙復祥・劉雲峯の諸人を以て最も力む者となす。紳學界中は則ち李白垓・呂志伊・李臨陽・趙伸・謝樹瓊等有りて互に策應す。」

以上に掲げた四點の資料の何れにも、雲南起義が天津に於て行われた蔡鏜を中心とする軍事計畫との關係に於て爲されたとは記されて居らず、却つて蔡鏜が雲南に入つた時には、既に此の地に於て獨自的にその計畫が略々決定されていたことを示している。若しそうでなく、通説に従つて解釋すれば、先述の如く十九日に入滇した蔡鏜が、その軍事計畫を雲南軍界に示して始めて事を起したことになる、その間、四・五日にすぎず、又蔡鏜の密函を以て先着した(十二月十四日)王伯群は蔡に先んずること僅か五・六日であつて、何れにしても先の様な解釋は時間的にみて全く不合理なことは明らかである。又第三次秘密會議の後、十

二月九日には鄧太中・楊藜の率いる兩支隊が四川邊界に向つて出動を開始しているという事實も、この計畫が蔡鏜の入滇以前である事を裏書きするものといえよう。梁啓超が此等の點に全然觸れていないのは、恐らく彼がその間の事情を知りながら、その主動の功績を蔡鏜及自己に歸せんが爲のものであつたとしか考えられない。ただ此の場合、後にも觸れる如く、蔡鏜の入滇が傳わると共に、彼の到着を待つ爲にその計畫實施が延期されたこと、及び雲南と極めて密接な關係を有する彼の參加が、最後の起義促進に與つて大きな力となつたことは事實である。

この様にして、雲南に於ける起義の計畫が、蔡鏜のそれと關係なく獨立して行われたものであつたことは既に明らかになつたが、更に此等の資料は、この起義の主體が實に雲南軍界の中下級士官のグループを中核とし、それに加ふるに雲南共和派の一部であることを明確に指摘しているのである。その當初の謀議に與つた者の氏名が、上掲の何れの資料とも大體一致していることは、その客觀性を證するものであろう。ただその時期について、李白垓の記事が十月の末頃としているのに對して、鄒魯のそれは籌安會發生

の直後の事とし、その後の數次にわたる秘密會議の期日を明白に示している。そして十一月の初めには、その作戰計畫が略々決定されていたことは、兩者の資料が一致して述べているところである。

三 雲南に於ける革命の諸條件

さて、雲南軍界こそこの起義の主體であつたとして、然らば一體何故に彼等が第三革命の發動者としての重要な役割を演ずるに至つたかという理由について述べなければならぬ。以下に於て、その背景となつた事情を當時の雲南の實狀に即しながら、次の四つの觀點から考察してみたいと思う。

一、雲南の地理的位置

第三革命が從來の革命的地盤である華中・華南から遠く離れて、雲南という中國の最も邊境の地から起つていることは、第一・第二革命の場合と異なる重要な特色であるが、それには又必然的な理由があつた。即ち、第二革命を契機として政權のピークに立つた袁世凱は、北洋軍閥或は之と關係ある將軍を都督に任命し、北京政權の勢力が南

方各省に深く浸透するに及んで、その勢力圏外に残されたのは僅かに廣西・貴州・四川・雲南を敷えるのみとなり、他の諸省に於ては、國民黨を中核とする倒袁勢力は殆んどその地盤を喪失していたのが實状である。而して、此等の地方が遂に袁の勢力の侵入から免れたのは、一つにはこの地方が袁政權からすれば遠隔の地に位置した爲であり、又此等の省の都督が總て國民黨系に屬さなかつたからである。この様な理由から、國民黨右派分子も次期討袁の根據地として、早くも此等の地方に着目したことは後にも觸れるところであるが、この中、雲南地方は四境山に圍まれ、加えてその西南兩面がフランスの勢力範圍に屬する越南の地に接していることは、後方の脅威から解放されるという利點を意味する。この様な地理的・軍事的有利性は更に次に述べる種々の歴史的原因と相俟つて、最も邊境に位置する雲南をして、起義發動地としての使命を負わしめたのである。

二、雲南新軍と蔡鍔との關係

次に起義の主體となつた雲南新軍の當時の兵力はどの程度であつたか。趙鍾奇（護國軍第三軍第一梯團長）の「護

國運動的回憶」によると、雲南には當時二個師團の兵力があり、戰鬥兵は一萬七千人。之に加うるに附屬部隊が約二萬人程あり、裝備は全て清末に購入したドイツのクルップ製ライフル銃を以てし、野砲・機關砲も亦、當時の最新式のものであり、銃彈は歩兵銃一挺につき一千發、機關砲は四千五百發を配し、雲南の彈藥廠に於ては毎日二萬發の子彈が製造可能であつた。尤も袁世凱は南方兵力削減の目的を以て、雲南の軍費豫算を縮減し、民國三年度の豫算卅二萬餘が四年度に至つて、その四分の三の廿四萬餘になり、財源の不足を告げつたといはれ、この様な優秀な裝備を有する軍隊は西南各省は勿論、全國的にも北洋軍以外に殆んど無かつたといわれ、蔡鍔が「滇軍精銳冠於全國」というのはあながち誇張ではなかつたであろう。最も邊境に位置する雲南にしてこの様な優秀な新軍を有していたのは勿論、理由がなければならぬ。即ち、雲南新軍は朱徳の描寫によれば「口もとには不屈の頑固さが見えながら、その態度は控え目でいんきんで細く弱々しい男」而も「當代の最もかやかしく活動的な指導者、生れながらの組織と行政との才幹を持ち」、「中國西部には彼程の實録のある

指導者はなかつた」といふ蔡鏜が經營したものであり、將校の大部分も亦彼の養成するところであつた。彼は日本陸士の留學生中最初の卒業生として雲南に入るや、旅團長として、又軍官學校の教官として新軍建設の中心となつて活動した。新軍に於ける又軍官學校に於ける規律と訓練が峻烈を極めたことは、當時候補生の一人であつた朱徳も認めるところである。而も注目すべきことは、この様にして經營せられた新軍が、第二革命後、袁の政策によつて蔡鏜が都督の地位を捨て北京に移つてからも、その起義に至るまで袁の手を加えられずして、最も純正にその組織が維持されて來たことである。これは當時として例外に屬することと云ねばなるまい。というのは、「一般的に云つて、各省の軍隊が始め何人かによつて經營されたとすると、袁世凱はその人のその地方に於ける勢力の過大になるのを忌み、多くはその人を厚く聘用するとの名儀の下に、之れを北京に招致するか、又は他に移して、其の人の造つた軍隊には新に彼れ直屬の部下を送つて、從來の勢力關係を攪亂する」といふ手段に出るのが常であつた。^山然るに、雲南軍隊が袁のこの様な慣用手段から逃れることが出來たのは、主と

して彼蔡鏜の深謀によるものであつたと考えられる。即ち、彼が北京に招致された時、袁の命のままに動いて他意なきことを示したのは、恐らく彼が苦心經營した雲南新軍に袁の手が加わることを憂慮した爲であつて、朱徳がこの時の蔡の意圖は「雲南の革命的政權を温存しておき、共和派がその崩れた陣營を再び整えるまで、省を國民黨の勢力下に置いておこう」といつているのは、恐らくその眞實をついているものと云うべきであろう。そして彼は、その後任に後輩である唐繼堯を据えて北京に入つたのである。又、「一四年夏頃に、袁が多少南方の軍隊に手を著けんとするの勢を見るや、蔡鏜は唐繼堯をして逸早く袁世凱に帝制を決行すべきの密電を發せしめたと傳えられる^山」のも、この事を裏書きするものといえよう。かくて彼は北京にあつて、陽に袁世凱に忠誠を誓ひ、陰に自ら扶植した雲南新軍の精銳をして、最後まで袁の攪亂の手を避け、強固なる結束を保持せしめたのである。

三、第三革命に於ける新軍將校の位置

第三革命に於て、新軍將校がその主導性を握つたといふことは、雲南の場合のみに限らず、當時之に響應した各省

に於て全國的にみられた重要な現象であつた。その理由は第一革命と第三革命との性質の相違から由來すると共に、彼等が當時に於て共和護持の中堅分子であつたことである。平川清風氏は、その「支那共和史」の中で、「第一革命が其半面に於て思想革命の性質を帯びているのに對して、第三革命は既にその思想革命を経たものが、其の改造の方法としてとるべき第二次革命的性質を持つてゐる。是れ曩に孫文一派を中心としたるもの、今や變じて軍人一派を中心とするものと變じた理由である。」と述べ、軍人一派といつてもそれは新軍の少壯中下級士官を指すものであるとして、彼等が「帝制の復活を嫌忌してゐたことは、恐らく第三革命の中輔をなす一大題目であろう。」と指摘してゐる。之に續いて氏は更に「少壯士官と云つたところで多くは族長階級の將校である。彼等の大部分は日本留學生又は日本教師の教育を受けた新式軍隊の中核である。彼等は、彼等の長官たる省の將軍に對して曰く、若し國體變更に賛成せば我等は自ら起つて事を擧ぐべく、決して其指揮に應ぜずと。彼等の此態度は各省將軍をして中央にのみ叩頭するを許さなかつた。支那に於ける少壯士官の一味は確かに共和護持

の、中堅である。若し是等が其上長官たる將軍を暗に牽制することがなかつたなら、頭腦に於て閑歴に於て、共和よりも帝制に共鳴多き各省將軍らは、恐らく其全部が帝制の復活を謳歌したに相違ない。民國史を研究する者は支那の少壯士官階級に就いて必ず閑却してはならぬことと思ふ」と論じてゐる。之れは確に今次の革命に於ける主體性の問題をついた卓見と云うべきである。蓋し、華中・華南に於けるが如く、深刻な革命的思想家を生み出したことのない雲南に於て、所謂革命家ならざる軍人が第三革命の發動者として現れたのは、上述の理由によつて決して偶然ではなかつたのである。そして彼等が既に辛亥革命の洗禮を受け、新式軍隊の中核を形成してゐたところの中下級士官であつたことは次に述べる如くである。

四、雲南に於ける新軍將校の動向

雲南に於ても他省に倣つて、清末から屢々日本留學生を派遣したが、この中、日本陸軍士官學校に入學した者の數が總計廿八人の多きに及んでゐる。之れは當時に於て、全國各省の中でもその數の最も多い省の一つであると云つてよい。その他、日本で軍事學・政治學を學び歸國して後、

辛亥革命に際して活動した者も数少くない。雲南が中國の邊境に位置しながら、この様な方面に於てはいわば先進的な省の一つであつたといえよう。そして彼等の大部分は一九〇五年、東京に於て成立した同盟會に参加し、孫文の革命思想の薰陶を受けて歸國して後、或る者は講武堂の教官となり、營長（大隊長）となり、團長（聯隊長）となり、或は旅團長となつた。特に此等士官生の中でも先鋒格であつた蔡鍔は、當時の雲貴總督李經羲に注目せられ、僅か廿七歳にして鐘麟のひきいる新制第十九師（新軍の中核）の第卅七旅團長に昇進した。李の信任を受けた蔡鍔は羅佩金を推せんして第七十四聯隊長とし、唐繼堯・雷震等を大隊長に据え、かくて、日本陸士卒業の士官は辛亥革命前の雲南に於て、既に相當な地盤を築きつゝあつたのである。そして此等少壯士官は若い候補生と共に、雲南に於ける同盟會員―知識階級・若干の商人・中産階級或は哥老會員と連絡をとり、孫文の指令によつて新軍の中で秘密に政治工作を行い、又軍事蜂起についても語り合つた。勿論、此等共和派士官は北京政府からスパイとして送られてきた帝制派高級士官によつて、きびしい監視の眼を向けられていた。

然し、武漢革命勃發後二句にして、蔡鍔は新軍をひきいて起ち上り、彼は推されて、都督となり、數日を出でずして全省は滿洲政權の支配から脱したのである。然し、この喜びは束の間であつた。一二年孫文と袁世凱との妥協の報道は雲南に於ける新軍の士官と兵士との間に動搖と士氣の低下をもたらさずにはおかなかつた。當時中隊長として四川省の革命政府樹立の援助に赴いていた朱德が、その時のことを振りかえりながら次に述べている言葉は、第三革命が正に雲南によつて惹起されるべき必然性を端的にあらわしているものと云えよう。

「一九一一年の革命は錯誤から錯誤への連続であり、一方で袁と外國人とは、革命をこつびどく叩きつけるかと思えば、承認と財政援助とで誘惑し、まるで猫が鼠をなぶるようなものだつた、ということである。雲南革命軍としては、四川省でぐずぐずなどしてないで、ただちに華中の武漢三鎮に進撃して、袁軍を粉砕すべきだつた。」⁽¹⁰⁾

辛亥革命に於けるこの様な失敗は、然しながら、圖らずも雲南にとつて貴重な經驗を與えることになつた。

「軍官學校の再開と共に、中國各地—或る者は遠く上海や廣東にまで—の革命に参加して歸校した候補生の體驗と情報が雲南新軍の將校士卒に大きな影響を與えた。更に當時の雲南は共和派が實權を握つてゐる少數の省の一つであつた爲に、既に始つていた袁世凱のテロを避けて、他省からの亡命者でいっぱいになつて行つた。その連中が、教師や役人や士官になり、彼等はそれぞれ中國各地に於て行われている袁世凱の共和派に對する壓迫の歴史を訴えた。」

朱徳の語るこの様な言葉は、第二革命後の雲南が急速に來るべき倒袁の根據地と化しつゝある模様を傳えるものとして重要な個所である。この様な情勢の中で、袁の帝制への意圖が加速度的に高まつてくる時、雲南新軍の少壯士官によつて第三革命への踏切りがなされたのは當然の歸結とも云えるであらう。

先掲の趙鍾奇の「護國運動的回憶」には、その間の事情を、

「雲南に於ては革命の氣運が非常に濃厚であつたので、籌安會成立後、反袁の空氣が醸成された。當時、留日士

官・候補生は一般に軍隊に於て既に聯隊長以上の職に在り、講武堂（軍官學校）を卒業した候補生も亦、中隊長以上になつていた。……當時、この様な中下級將校は何れも自己の上官に對して、反袁に起ち上る様しきりに手紙を以て訴えた。かくて革命の潮流は軍隊内部に於て不斷に湧き起つてきたのである。」

と述べている。

又、辛亥革命の洗禮を受けた新軍士官が、護國軍に於て中心的な地位を占めていたことは、その軍政府の組織に於て明らかに觀取されるところである。即ち、第一・二・三軍の總司令である蔡鍔・李烈鈞・唐繼堯は云うまでもなく、總司令部秘書長李白垓・參謀廳長張子貞をはじめ、十三人の梯團長の中で、劉雲峯・趙復祥・顧品珍・張開儒・方聲濤・趙鍾奇・韓鳳樓・黃毓成・劉祖武・庾恩暘等が何れもそうであり、當時、蔡鍔の下で第一軍第三梯團第六支隊長であつた朱徳も亦その中に含まれていた。而も此等の大部分は日本陸士の卒業生であつた。更に、軍政府を組織した支隊長以上の全員四十八名の中、廿八名が嘗つて同盟會或は國民黨に入黨してゐるものであつて、このことは第三革

命がその直接の目的と性質に於て第一革命と異つたものがあるとはいへ、少くとも起義の發生地となつた雲南に於ては、その主體となつたものは共通しており、兩次の革命が政治的・精神的に密接な關係にあつたことを示しているのである。

四、唐繼堯の立場

更に次の問題は、當時の雲南都督として獨立宣布者の筆頭となり、又護國軍第三軍の總司令の職に就いた唐繼堯が、この起義に對し事實どの様な態度をとつたか、又先述の雲南軍官とどの様な關係にあつたかという點である。既に第一節に於ても觸れた様に、梁啓超の記事には唐繼堯の名前すらみえず、彼のこの運動に於て占めた地位を抹殺するかの如くである。又それほど極端でなくとも、彼の起義参加は決してその本心から出たものではなく、被動的なものであり、更に人物論の上から蔡鏜に比較して彼が數段劣り、且つ私心を以て事に當つたとする考えが行われている。例えば「趙國勛致桿臣函」⁽²⁾即ち袁世凱の密偵の得た情報には

「……翌日、(一月四日) 潜かに各處に往き一切を詳

査して、始めて此次の滇省の獨立は實に唐の本意に非ずして、乃ち蔡松坡・張開儒・羅佩金・張子貞及び少數の暴烈分子が唐を脅迫して起つたものであることを知つた。」

とあり、之れはスパイの探知した情報であるから、可成の程度その眞相をついているものといえる。ここに云う少數暴烈分子というのは即ち起義の發動者たる少壯軍官を指し、唐繼堯は彼等から強迫されて起つたものとしている。又、第三軍第三梯團第六支隊長であつた葉成林は、その「護國運動的一段回憶」⁽²⁾の中で次の様なことを記している。

「唐繼堯は蔡鏜が雲南に到達するまでは反袁などということは考えていなかつた。彼は既に袁世凱より官位を受け、又、その恩典に接していた。蔡鏜が若し雲南に來なければ、彼はきつと反袁などということには關係しなかつたに違いない。雲南の起義は自分の知る限りでは、蔡鏜が主動であつて、唐繼堯は彼に動かされたものである。然し、當時の軍政の大權は唐繼堯の手中に掌握されて居り、彼が最後には同意して起義に参加したという點に於ては功勞があつた。然し彼は蔡鏜と肩を並べること

は出来ない。實際の話、蔡の偉大な人物に比べて唐は小人にすぎない。蔡の眼光は遠大であり、唐の眼光は狭小である。蔡は公の爲にし唐は私の爲にする。」

唐繼堯に對するこの様な評價に對して、一方彼を蔡鏜と並んでこの運動の主動者とする考えもかなり普遍的にみられる。例えば「護國運動的回憶」には、唐・蔡の二人は、「志同道合」の親友であつて、籌安會の出現するや、兩者は密書を交換し、倒袁・及び蔡鏜の日本亡命について密接な連けい同意があつた。然るに梁啓超はこの様な事實を認めず、却つてこの運動を通じて唐が蔡を制肘したといひ、「抑唐揚蔡」の態度をとつているのは事實を歪曲するものであると非難している。

又、護國軍秘書廳長の由雲龍は「護國史稿」の冒頭に於て、

「護國の一役、内は則ち雲南の種々の計畫が定まつて後動き、外は則ち各省及國際の環境が一時に集り、皆な此の役に直接間接の影響があつた。故に内部の計畫が周密であつたのは、主として唐繼堯の策動によるものである。外部の諸狀勢の觀察が詳細であつたのは、蔡鏜とそ

の師梁啓超の補助によるものであり、内外相合したものと云うべきである。」

と述べている。

又、我が國でも早く波多野乾一氏等は、その「支那政黨史稿」の中で、「唐の第三革命に於けるや、黎元洪の第一革命に於けるが如きものでなく、殆んど起義の中心人物を以て目すべきものがある。蔡の行動の劇曲的なるに依つて、世人は多く蔡のみを認め唐を認めざらんとする傾向があるが、予は唐の遣り口の飽くまで堅實なるを認識し云云」とのべ、唐繼堯の起義に於ける主動的な地位を強調してゐる。

以上の如く、護國軍の首席の地位にあつた唐繼堯に關して、内外から——特に護國軍内部に於ても——全く相反する説が行われていることは注目すべきである。この様な疑問を解明する爲に、彼の行動を起義の當初から獨立宣布に至る迄の經過の中に辿つてみたい。

先ずこの起義の最初の謀議がもたれたのは、第二節に於て述べた如く籌安會發生直後のことであつた。そしてこの謀議の發頭人は少數の軍官であり、その際、蔡鏜と共に唐

繼堯の名が既掲の何れの資料にもみられないことや、又、此等軍官が秘密裡に決めた「四項辦法」なるものによつても、唐繼堯がこの最初の謀議に加わつていないことは明白である。而して李白垓の記録によれば、

「この謀議を最初の間は唐繼堯に秘していたが、議熟して後、黃・鄧・楊の三人が同志全體の代表者となつて、一夕この密謀を唐に告げ、又黃毓成に客となつていた方聲濤（十月入滇）が熱心に海外の反袁事情を説いて、ここに唐の参加が決定した。」

といわれる。然しながら、この事實を以て、彼の起義参加がその本心から出たものと即断することは必ずしも當を得ていない。というのは唐の参加は、かの「四項辦法」によれば正しく絶對絶命の場（参加か追放か殺戮）——先の袁の密偵の言によれば「挟制」——の場に於てなされたものである。之れは彼の態度に對する第一の疑問であるが、何れにしてもその参加決定後、九月十一日、唐繼堯は第一次團長會議を開き、彼の主張で無記名投票に依つて反袁が全體一致で決められ、(一)積極提倡部下愛國精神。(二)整理武裝、準備作戰。(三)嚴守秘密。の三項が議決された。續いて十月七

日、第二次秘密會議が開かれ起義の時期を相談し、(一)中部各省、有一省可望響應時、即起義。(二)黔・桂・川三省中、有一省可望響應時、亦起義。(三)海外華僑或黨接濟餉械、亦起義。(四)如以上三項時機均歸無效、則本省爲爭國民廉恥計、亦孤注一擲、宣告獨立。の四項が決定された。即ち、この時は未だ起義の期日が確定されないで、客觀的條件の如何に依存しているのである。このことは一面、唐が未だ當時靜觀的態度をとつていたことと關係がある様である。即ち、十月十四日、蔡鍔の邸が袁の手先によつて搜索されたとの情報が傳わると共に、鄧・楊等の軍官がその起義を唐に迫つたのに對して、彼は各方面の情況不明の故を以て極力彼等の行動を抑えたといふことは、之れを裏書きするものといえよう。續いて十一月三日、第三次秘密會議が開かれ羅佩金を中心にして作戰方略が決定され、十二月九日には鄧太中・楊葵の兩支隊が四川國境に向けて先發された。かくするうちに十二月十七日、國民黨右派の連中が到着し、ここに愈々袁世凱登極の日を以て獨立を宣布することになつたが、適々蔡鍔・戴戡の入滇を知り、先に決定した作戰方略の發表を延期した。かくて十九日蔡鍔の到着は同志の討

袁に對する熱意を一層促進することになつた。然し、この時に及んでも唐は依然として反袁の全國的な情勢を理解せず、又北洋軍の實力に對する顧慮から「雲南の一隅の地を以て擧兵することは甚だ危険である。」との考えを棄てなかつた。例えば、二十一日に開かれた第四次軍事會議の席上、一軍官が雲南の軍事力を以て倒袁行動に出るには慎重な考慮が必要であると發言した時、蔡と肩を並べていた唐が、宛もこの軍官の説に同意するかの如くうなずき、蔡鏜の方に向つてその返答を促したという光景が傳えられている。唐を含めて一部の間に此の様な空氣があつたことは事實であろうが、少壯軍官の強固な反袁の意志と、蔡鏜の熱心な説服と更に起義決定の前夕即廿二日、蔡鏜に送られてきた一密電によつて最後の決定がなされたのである。

その一密電とは、袁世凱が周自濟を贈助特使として秘密條約締結の目的を以て日本に派遣することが決定されたことを馮國璋より梁啓超に知らせるものであつた。これは一面、馮國璋の反袁意志並に馮が響應の準備をなしつつあることを示すものというべく、このことは唐の全國的な反袁の情勢に對する疑念を除くに大いに力となつた。と同時に、

この一文ははからずも擧兵の時機を促進せしめることになつた。即ち、特使派遣によつて、帝制承認引換への條件として日本に重大なる利權を提供する以前に獨立宣布の必要を認めただからであつた。かくて廿二日に開かれた最終の第五次軍事會議の席上、蔡鏜は「即日擧師討袁」を力説した結果、全員の賛成をえて、翌廿三日帝制取消要求の電文が發せられたのである。と同時に、雲南軍を護國軍と改稱し、唐繼堯が軍都督兼第三軍總司令となり湘漢に、蔡鏜は第一軍總司令官として四川に、李烈鈞は第二軍總司令として廣西を経て廣東に出發することになつた。續いて廿六日、袁の返電なきままに雲南は正式に獨立を宣布した。

以上で大體起義に至るまでの經過を中心として、唐繼堯のこの間に於ける態度を述べたのであるが、之れを通じて、彼が決して雲南軍官を率いて起つたのではなく、寧ろ被動的、靜觀的な態度を持していたと考えられるのである。從つて結論的には、趙鍾奇が、

「唐繼堯は自分の部下の反袁の決意が堅く、又大勢の趣くところ之に抵抗することの不可能なのをみて、彼等に隨つて反袁に加わつた。」

と云つてゐるのは、事の真相を傳えているものといふべきであらう。

五、舊國民黨系との關係

次にこの護國軍運動と舊國民黨系との關係に就いて考へてみたい。これに關して、第二節に掲げた鄒魯の記事の冒頭に、雲南軍官が中華革命黨の命を受けて入滇した呂志伊によつて動かされた様に述べられているが、彼は起義後、南洋との連絡に派遣された爲にまもなく雲南を離れた。尤も彼が最初の謀議に参加してゐたことは前掲の資料によつて事實であることに相違ないが、といつて彼一人によつて雲南軍界が動き初めたと考へるのは過大過價であらう。更に孫文の組織した中華革命黨は、一九一四年六月より十月にかけて、江蘇、浙江、山東、廣東等の各地に於て倒袁の軍事的暴動を起し、一五年十二月には陳其美らの上海に於ける肇和艦攻撃の擧があつたが、何れも革命黨の秘密性と排他性に禍されて、僅かに散發的・投機的な發作に終つてゐる。そして孫文一派が護國軍運動に殆んど關係なかつたことは既に吉野博士・平川氏等の説の通りである。この點

からみても、鄒魯が呂志伊の雲南起義に於いて占めた位置を、孫文や中華革命黨との關係に於て誇大に述べてゐるのは爲にする説であるといわねばならない。

以上の如く、第二革命後の國民黨の分裂の結果生じた中華革命黨が、この起義に關係なかつたのに對して、一方革命黨外にあつて「歐事研究會」を組織した黃興を中心とする所謂國民黨右派分子は、この起義に際して、積極的に梁啓超らの進歩黨と接近して倒袁の爲の統一戦線を結成しようとした。然し彼等は最初から倒袁に熱意を示したのではない。即ち廿一條要求に際して、中華革命黨が先ず徹底的に袁世凱政權を打倒しなければ、中國の自由獨立はありえないとして反袁鬭争を續行したのに對して、右派の連中は、(一)暫事力持鎮靜、使政府得以全力對外。(二)與國民一致抵禦外侮。の議決を發表して、中日交渉の時期に反袁鬭争を行ふことを認めなかつたのである。然し袁世凱の廿一條要求の受諾と帝制運動の露骨化と共にはじめその戰術を轉換し、黃興・陳炯明・李烈鈞・鈕永建・林虎・熊克武・程潛等は「上海申報紙」上に於て反袁表明の宣言を掲げるに至つた。(一五年五月卅日)當時彼等の多くが亡命してい

た東京は初期に於けるこの運動の策源地となつた。そして李根源らは第二革命の時の討袁總司令岑春煊を南洋より迎えんとし、又李烈鈞一派は雲南・四川を以て來るべき討袁の根據地となすべく、蔡鍔と秘密の連けいを結ぶに至つた。その理由は、雲南が當時北洋軍の空白地區であり、この地を利用して討袁の根據地とする爲、黨員を派遣した結果、雲南に於ける軍官民の蔡鍔に寄せる信望をみ、蔡を擁して雲南に擧兵すれば反袁鬪争が容易に組織されると判斷したからである。而して彼等は蔡鍔と同學の黨員張孝准を通じて機會あれば東京に到つて倒袁の共同計畫を立てることを提案した。³³かくて天津に於て張孝准の迎えを受けた蔡鍔が彼と同道して日本に向つた理由には、袁の監視の眼を逃れる爲であつたと同時に又、東京の國民黨右派との結合の目的があつたと考えられる。これによつてみれば、國民黨右派分子が雲南を討袁の根據地として着目し、之が實現の爲に蔡鍔と結び更に進歩黨と接近していつたと共に、蔡鍔もやはり第二革命に失敗したとはいへ、國民黨右派の討袁勢力に期待をかけ、之れと聯けいを保持せんとしたことが明白である。その後、彼等は上海・香港等に移動して、蜂起

の計畫をなしつつあつた。一方雲南軍界に於ても、愈々起事決定をみるや、先ず此等の同志の間にその旨を告げて援助を乞うと共に、東京國民黨右派も亦方聲濤を雲南に派遣して各地の反袁の情報を傳え、相共に提携して倒袁に當ることになつた。即ち李白垓の前掲の資料の續きに、雲南に於て、起事の軍事計畫が立てられて後、恐らく十月の終りか十一月の初めの頃のこととして次の通り述べられている。

「然るにここに圖らずも二つの出來事が起つて、その當初の出征計畫が改められ、更に別の方法で一層大規模にやることが決められた。その一は當時上海、香港方面に根據を据えて、是亦同じ目的で陰謀を目論見て居つた李根源・鈕永建・谷鐘秀・張榮廷等の同志より電報を以て廣西・江蘇齊しく頼むべきを報じ來つたことである。先是、雲南が愈々起義の議を決するや、密使を上海、香港等に派遣して、大事を擧ぐべき旨を諸同志に告げた。その結果李根源等の一派は外部より之を聲援するといふ譯になつて居つたのである。……その二は方聲濤が新に海外より歸り、潜かに雲南に這入つたことである。彼は專ら海外の形勢を説き、事を擧ぐるの絶好の機會は、今日

を措いて復た來らざるべきを主張した。此の結果として、方聲濤は唐將軍の代理として雲南を出て、上海、香港の間に往來して李烈鈞、李根源等と連絡をとる事となつた。かくして雲南の政府は外部の同志と巧みに連絡を保ちつつ、頻りに内部に於て獨立の準備を整えて居つたのである。而して十二月中旬には李烈鈞・熊克武等凡そ十餘人を微服して雲南省城に這入つてきた。

又「護國史稿」に引くところの「日人北京有志團之宣言序文」に、

「此次の雲貴の獨立は、民國成立後、袁氏の帝制への野心に對して、進歩黨の首領等が、主義の上より之に反對し、多數の人民の奮發義憤する者、最も中心の勢力となる。而して革黨の分子、之れと勾通するは、その結果頗る鞏固なるを徵するに足り、決して侮るべからず。」とあり、之れについて由雲龍は更に次の様につけ加えてゐる。

「雲南軍政の要人の多くはもと國民黨員である。起義の後、曾つて唐繼馮・李宗黃を上海に派遣して革命同志と連絡せしめ、又、孫總理・陳英士兩先生の指示を受け、

沿江一帶の黨人を號召して直接間接の協力援助を請うた。……事實、起義の中堅人物である唐繼堯・李烈鈞・熊克武等の如きは皆な國民黨の要人であり、他黨がその勢力を左右出来るものではない。」

即ち、此等の記事が護國軍に於て占めた、舊國民黨系（特に右派の）の勢力を高く評價している點に於て、その指摘は正しいものであつた。然し、彼等の活動は起義に對する軍資金、軍需物資の援助或は外部との連絡の面に於て特に功績があつたのであり、この起義計畫の主體となつたものは、飽くまでも雲南少壯軍官のグループであつたことに變りはない。即ち起義當初に於ける護國軍の支隊長以上の職は、大部分雲南出身の軍官によつて占められ、外部から入つた舊國民黨に屬する者は、李烈鈞・方聲濤らの極く少數であつた。又、このことは進歩黨系が當初護國軍に於て占めた地位についても該當することであつて、雲南と特別の關係にあつた蔡鍔を除けば、進歩黨系に屬する者は戴戡・陳廷策・藉忠寅等の三人にすぎず、梁啓超の如きは遂に雲南に入ることがなかつた。彼が護國軍と事實上接觸する様になつたのは、廣西都督陸榮廷の密使の迎えを受けて秘か

に上海より脱出し、日本人の援助により三月十六日海防に到着、更に廣西を経て廣東に入つてからであつた。(従軍日記)この運動は進歩黨と國民黨右派との統一戦線の性格をもつてゐるが、然し起義當初における以上の事實は、これを無視することは出来ないと思われる。

六、諸省の響應と軍務院の成立

雲南起義に際して今一つ注目すべきことは、この起義が當時の雲南人民によつて熱烈に支持されたことである。又、このことは護國軍の軍規が北洋軍に比してよく保たれたことと合せて、作戰に當つて農民の協力をえ、食糧・彈藥・傷兵の輸送或は敵軍の情報提供等に於ても極めて有利な條件を得ることができた。この事については由雲龍・葉成林の記録にもみえるし、又朱徳が四川の瀘州攻撃を回想して語つた言葉の中にも現われている。

ともあれ作戰の早期實施と、袁軍に比べて兵力・彈藥共に絶對數に於て劣る護國軍が、よく袁軍の増援に對抗して豫期の如き成果をあげえなくとも、三月中旬まで四川南部を戰場として、その力量を可成の程度まで發揮しえた背後

には、「哥老會の農民」更には一般民衆の中に於ける反袁の感情が高まりつゝあつた事實を指摘せねばならないであろう。この廣汎な民衆の反袁感情と四川・廣西・廣東諸省の響應は、北京政府をして二月廿二日登極請願禁止令、更に三月廿二日帝制取消を發表せしめるに至つた。最後に、雲南獨立に響應するに至つた諸省の概略の事情を述べて、軍務院成立並に撤銷の歴史的意義を考えてみたい。

先ずこの運動に最初に響應して獨立宣布をしたのは貴州であつた。(一月廿七日)貴州は雲南と地理上・戰術上に於て密接な關係にあることは云うまでもなく、若し貴州が北洋軍の手中に陥るならば、護國軍にとつて極めて不利となるのみならず、湖南を経て長江流域に出ることも不可能になる。従つて雲南獨立宣布と共に、蔡鍔は貴州護軍使劉顯世に對して響應を勧め、更に一月二日戴戡・王伯群を貴陽に送つて滇黔兩軍聯系の工作をなさしめた。

そもそも貴州に於ては、辛亥革命に際して同盟會に屬した自治學社が張百麟らにひきいられて革命の中核となつたのであるが、光復後、興義の土豪劉顯世をはじめとして任可澄・戴戡らの君憲派が自治學社に對立し、哥老會匪の亂

に名をかりて蔡鏜に滇軍の派兵を乞い、徹底的な反革命を行つたという痛ましい歴史をもつている。⁵⁵その後劉顯世は貴州都督唐繼堯の下で軍政部長になり、つづいて護軍使として貴州の兵權を握つた。この様な經歷を有する劉顯世が護國運動に自ら進んで響應する筈はなく、雲南の勸告に對して極力局外中立の立場を採つていたのである。然るに早くから獨立を主張していた貴州軍團長王文華・熊其勛・吳傳聲等は劉のこの様な態度に強く反對し、更に一月十八日に開かれた人民代表大會は劉顯世に獨立宣布の要求を議決した。⁵⁶そして同廿四日、蔡の率いる軍隊が貴陽に進出するに及んで廿七日客觀狀勢の逼迫は遂に劉顯世をして獨立宣布の已むなきに至らしめたのである。

續いて三月十五日廣西が獨立した。この點について、吉野博士や平川氏らは既に革命の前後から豫想されていたことであつたとされているが、然し事實は、都督陸榮廷の護國軍に對する態度も極めて曖昧なものであつた。勿論彼は袁世凱に對して兼々不滿を持ち、又袁も彼に對して王祖同を巡按使として廣西に送り、暗にその行動を監視せしめる等のことをしていたが、然し之れを以て吉野博士の言の如

く、「彼の袁世凱に對する態度は初めより鮮明なものであつた」とはいひ難い。即ち雲南獨立宣布當時、その響應を促されたにも不拘、僅かに廣西・雲南の不可侵を約するに止つて、局外中立の立場をとつた。彼も亦北洋軍閥の勢力を恐れると共に、何よりも馮・段の動向を注目し、一六年一月、唐・伯珊・陸協五の二人を上海・南京に派遣して馮との連けいを強化すると共に、梁啓超を廣西に迎えんとした。更に三月七日袁世凱より貴州宣撫使の命を受け、龍觀光と同道して雲南に向つた時にも、彼は依然として形勢觀望の態度をとつていた。即ち陸の監視役王祖同の袁世凱宛の電文に依れば、十一日南寧を出發する直前、開かれた軍事會議の席上、廣西軍第一師長陳炳焜が討袁起義を陸に迫つたのに對して、彼は明白な態度を示さなかつたといわれる。⁵⁷彼が護國軍に響應して討袁を決定したのは實にその獨立を宣布した十五日の當日であつて、而もそれは廣西の中下級軍官の最後のな要求に迫られたが爲であつた。即ち廣西の軍官が鎮守使陳炳焜・譚浩明・英榮新に逼つて陸榮廷に最後通牒を提出して廣西の獨立宣布を要求したが、陳の文章中に「帝制の議起り、内外騷然。凡そ血氣ある者憤激せざ

るなし、我が省の軍心民氣、日に益々激昂し、大勢の趨く所、獨立は避け難し。」とあるのは、その事を傳えるものであり、廣西の獨立が決して陸榮廷によつてなされたのではなく、寧ろ軍民の要求―特に少壯軍官―が然らしめたところ云うべきである。

廣西の獨立について四月六日廣東、十二日浙江も亦獨立宣布してこれに響應するに至つた。廣東將軍龍濟光は第二革命に際し、廣東の國民黨に對して徹底的な彈壓を加えた張本人として袁の信任を受け、それ以來彼の勢力は南方に於ける北洋軍閥の一據點となつていた。然しながら廣東は依然として民黨の策源地であり、既に一五年七月、鐘明光らの舉あり、一六年に入つては徐勤・陳炯明・魏邦平・林虎・朱執信・鄧鏗・葉夏聲らが倒袁の軍を起し、三月三十日團長莫肇宇は潮仙に於て、續いて鎮守使陸世儲も亦欽廉に於て獨立に響應した。廣西の陸榮廷は龍濟光に對して屢々その獨立宣布を慫慂したが、彼は却つて袁に密電を發して北洋軍の南下を要求する有様であつた。然し北洋軍の到達前四月四日、廣東河に停泊中の寶璧・江大・江固等の艦船が突然民軍に呼應して自由行動をとり、更に五日徐勤の

指揮に屬する攻城司令魏邦平が艦船を率いて虎門に至り、廣州攻略の準備をするに及んで、六日遂に獨立を宣言した。然し獨立といつても、民軍の進攻と廣西軍の壓迫を受けた結果の已むをえざる自衛的獨立・僞獨立であつた。然るに、四月八日、廣東に於ける各黨間の軋轢を緩和し、民軍との合作を議する爲に龍が召集した所謂「海珠會議」の席上、龍一味の警衛軍統領顏啓漢が、梁啓超系の譚學衡及湯覺頓を刺殺したことから、彼は梁啓超の憤激を受けたが、結局、陸榮廷・張鳴岐の調停と袁世凱の密偵蔡乃煌の處刑を以て四月十九日龍との妥協が成立した。かくて四月廿七日、廣西都督陸榮廷・廣東都督龍濟光・梁啓超・李根源等は香港より入つた岑春煊を擁して兩廣護國軍都司令となし、其の司令部を肇慶城内に設置し、五月一日を以て其成立を祝した。更に五月八日、兼ねてより梁啓超の計畫であつた獨立四省を一團とする軍務院の組織が唐繼堯・劉顯世・陸榮廷・龍濟光の名の下に發表されたのである。その組織條令第一條によつてみるに、其の任務は「大總統に直隸し、全國の軍機を統一籌辦し並に戰事及び其前後一切の政務を行う」とある。即ち軍務院は事實上の臨時政府であつて、時

局を妥協的に解決せず、飽くまで四省の軍事的統一を謀り、袁政府に對し徹底的に其死命を制せんとするものであつた。而して大總統には黎元洪を推して虚位總統とし、撫軍長唐繼堯・副長岑春煊・撫軍兼政務委員長梁啓超の下に、劉顯世・陸榮廷・龍濟光・呂公望(浙江縣督)・湯蘇銘(湖南都督)・蔡鈞・戴戡・羅佩金・李烈鈞・陳炳焜(廣西陸軍第一師長)・李鼎新(海軍總司令)・劉存厚(四川陸軍第三師長)等十三名が撫軍の職に名を連れ、更に國民黨系の唐紹儀・李根源・谷鐘秀・鈕永建・林虎等もこれに参加するに至つた。⁴⁰⁾

七 運動の變質と限界

ところでこの様にして成立した軍務院は表面的にみれば從來の西南各省の護國軍を統一する機構として、この運動の歴史に於て一時期を畫したものであり、又、北方段内閣に對して大きな牽制の意義を持つたものと云えるであろう。然しながらこれをその内部に入つて考察すると、軍務院の成立は寧ろこの運動に對して限界と變質を齎すものに外ならなかつた。その主な二つの理由を次に述べたい。

第一に、この運動の眞の主動者が、決して都督とか將軍とかいわれる様な地位にある者ではなくて、新軍の中下級士官によつて起され、又民軍の起義によつて促進されたものであつた。この事情は先の四省をはじめ、その後獨立を宣布した浙江・山東・陝西・湖南に於ても大同小異であつた。此等の省の都督、將軍は北洋軍と倒袁の二大勢力の中にあつて、共和護持の中堅分子であつた少壯士官の力におされて結局半獨立・假獨立の名義を以てその態度を糊塗したのである。然るに軍務院の組織をみるや、雲南護國軍に於ける此等軍官は殆んど参加せず、撫軍として實權を握つたのは唐繼堯・陸榮廷・龍濟光・劉顯世・岑春煊・呂公望・湯蘇銘等の都督・將軍であり、その事實上の指導的地位に立つたのは進歩黨を代表する梁啓超であつた。即ち、軍務院の成立によつてこの運動のヘゲモニーは起義當初に於ける新軍々官から完全に此等軍閥政客の手に移行したのである。これは第三革命の主體の大きな變化を意味するのである。軍務院の成立が一旦、分散せる勢力の一大結集の様に見えるながら、而も内部に於けるこの様な變質は、この運動が當初の廣汎な反袁勢力の高まりにもかかわらず、

意外に早く北方との妥協が成立した根本的な原因であつた
と考えられる。

第二、この運動は倒袁という當時として最も時流に投じたスローガンの下に集つた進歩黨・舊國民黨系（特に右派分子）・西南軍閥の統一戦線の性格をもつていた。然しながら、一面これは、この運動の中に潜在する隠れたる弱點でもあつた。即ち袁世凱の急死（六月六日）によつて共同の闘争目標が失われたことは、この運動をして全く各黨派の勢力争いの場と化せしめる結果になり、その弱點がここに遺憾なく曝露されることになつた。軍務院の設立は主として梁啓超の構想43に基づくものであり、彼はその成立と同時に撫軍兼政務委員長の重要な職に就いた44。而も彼がその設立に當つては、殆んど陸榮廷や龍濟光等との相談の下に事を運び、これに對して「國民黨系のものはこの様な新機關の設立に反對し、暗に彼等軍務院發起者の獨り名を成さんことを牽制する有様であつた。」然るに依然として北方の情勢が好轉しないのを見た彼等は、「偶々軍務院の計畫發表と共に、兎も角從來の行き掛りを捨てて其傘下に馳せ參ずる事となつたのである。」結局この様な經緯から軍務

院が進歩黨系と國民黨系との連立によつて成立したといふものの、軍務院の實權を握る撫軍の職には進歩黨系が十一名という大多數を占めたのに對し、國民黨系の撫軍は僅か李烈鈞・岑春煊の二人に止り、他は總て伴食の地位しか與えられない結果になつた。一體、先にも觸れた如く、護國軍組織の當初に於て進歩黨系に屬するものは、僅か三・四名にすぎなかつたのが、軍務院成立を機として梁啓超にひきいられたその勢力は著るしく高まつてきた。これはとりも直さず、國民黨系と進歩黨との相剋が表面にあらわれてきたことを證するものに他ならない。而もこの兩者の對立は遂に軍務院撤銷問題をめぐつて完全に破局を迎えた。

即ち六月廿九日、南方の勢力に屈した北方政府は舊約法の恢復、舊國會召集を聲明して、南方要求の四條件の中二條件が解決されたとはいへ、内閣改造・帝制禍首の懲辦問題の二條件は未解決である。而も梁啓超・湯化龍等はこの際に於て既に種々の名目を以て軍務院撤銷の爲に暗躍を始めた45。これに對して、國民黨系の唐紹儀・孫洪伊・張耀曾等は殘る二條件が實現するまでは飽くまで軍務院の存續を主張した。即ち、元來北方に政治的基礎を持つ進歩黨系は、

自己にとつて最善の機會をみて之と妥協し政權の座に結托せんとしたのに對し、舊國民黨系が未だ北方にその政治的根據をみる能わざる現在、この護國軍を基盤にして徹底的に北方に對抗せんとしたのである。かくて軍務院内部に於ける兩派の分解は必至となり、更に七月十四日、北方政府の帝制禍首處罰の聲明を條件として、軍務院の撤銷が梁啓超によつて強引に實行されたのである。⁶⁴ここに國民黨は完全に梁一派に裏切られた結果になり、倒袁という目標の爲にのみ結合されて來た相矛盾する二つの勢力は、その本来の政争の立場に返つたのである。即ち相反する政黨による統一戦線の限界點が同時に又この運動の終局を意味したといえるであらう。

むすび

之を要するに護國軍起義は、第二革命後急速に倒袁の爲の客觀的諸條件の成熟した雲南の地を背景に、雲南新軍の中下級少壯士官が中核となつて發動されたものである。彼等士官の大部分は辛亥革命の經驗を経た共和護持の中堅分子であつた。通説の如く蔡鍔や唐繼堯を以てその發動者と

することは、歴史的事實を無視するものといわねばならぬ。而してこの運動は、又諸省に於ける少壯軍官グループの共鳴と民衆の支持をえて急速に進展し、北方に對して隠然たる勢力を形成した。と同時に、この運動が倒袁という共同目標の下に梁啓超を中心とする進歩黨系と右派國民黨系との統一戦線の性格を持つに至つた。

然し運動の進展と共に——特に軍務院の成立を機として、そのヘゲモニーは起義當初に於ける新軍の少壯士官の手から軍閥政客の手に移行し、更に、元來政治的立場を異にする進歩黨と國民黨系の勢力は、共通の目標を喪失することによつて忽ち對立政争を引き起し、軍務院の撤銷問題をめぐつてその破局に直面した。この運動が結果に於て第一革命と同じ運命を辿らねばならなかつたのは、主として以上の原因——主體の變化と統一戦線の限界——に基づくものと考えられるのである。

(一九五八・一〇・一四)

註

(1) 此の小論の構想が大體まとまつた時に、金冲及「雲南護國運動の眞正發動者是谁？」(復旦學報五六年二期人文科學)を京都日中友好協會を通じて閲讀することが出来、同論文と小論の決論

が偶々一致することを知つた。同氏もその中で、この運動に關して系統的な論文・著作が中國でも從來無かつたことを指摘している。然し新しい資料は最近「近代史資料」にも掲載され、又邦譯されたスメドレーの「偉大なる道」にも貴重な資料が含まれている。尙、金氏の論文は、その後半に於て、倒袁運動の必然性を袁政權治下に於ける經濟的・社會的矛盾を中心にして全國的な立場から述べてゐる。

- (2) 吉野博士「中國革命小史」大正六年八月刊。同「第三革命後の中國」大正十年二月刊「吉野作造博士民主主義論集」第七卷所収。松本鎗吉・波多野乾一共著「支那政黨史稿」大正七年二月刊。平川清風氏「支那共和史」大正九年九月刊

- (3) 「盾鼻集」、「國體戰爭躬歷談」(一六年、大陸報上に發表)「飲冰室合集」專集第九冊所収「護國之役回顧談」「飲冰室合集」文集第十四冊所収

- (4) 僅かに起事の點について「雲南軍界都是蔡公舊部、況且又經幾個月布置、自然根本上沒有多大問題、但到了臨事、也不免言嘍事雜、幾乎發動不成。」とあり、何か複雑な事情を暗示してゐる丈けである。(護國之役回顧談)

- (5) 前掲「第三革命後の中國」所収

- (6) 「國民黨史稿」第三篇、一〇五八—九頁

- 「國民黨史略」一六七—八頁

- (7) 次に掲げる二つの資料は先掲の資料を補う爲に金氏の論文より轉用。

- (8) 「近代史資料」(五七年第五期)所収

- (9) 由雲龍「護國史稿」(近代史資料 五七年四期)所収

- (10) スメドレー、邦譯「偉大なる道」上 九四頁

- (11) 「第三革命後の中國」一六五頁

- (12) スメドレー、一一九頁

- (13) 「第三革命後の中國」一六六頁

- (14) 平川清風「支那共和史」三八四頁

- (15) 右同 三七〇頁

- (16) 趙鍾奇「前掲書」

- (17) スメドレー、九一—九五頁

- (18) 右同 一一一頁

- (19) 右同 一一六頁

- (20) 護國軍の組織成員表は「護國史稿」及金氏の前掲論文參照。

辛亥革命時に於ける雲南新軍士官については、孫種因「重九戰記」附雲南首義諸人革命以前經歷(中國近代史資料叢刊、辛亥革命(六)參照

- (21) 金氏論文中「護國軍成員名表」參照

- (22) 「近代史資料」五七年第五期所収

- (23) 「近代史資料」五七年第五期所収

- (24) 前掲「支那政黨史稿」一七七頁

- (25) 吉野博士「第三革命後の中國」

- (26) 「中國國民黨史稿」一〇五八頁

- (27) 陶菊隱「北洋軍閥統治期史話」第二冊 一五二頁

- (28) 葉成林「前掲書」

(29) 「當召集第一次軍事會議時、議論非常複雜、各色各様都有。有說干得的、有說干不得的。當時有職位的、或職位比較高的、多不願意干、因爲他們害怕干起來丟掉了他們的職位。而沒有職位

的、因爲無所顧慮、他們希望在反袁中找尋出路、因此、都主張要干。當時分作三派、一派是主戰派、一派是保守派。一派則是中立派。」（葉成林前揭書）

(80) 陶菊隱「前揭書」一五三—一四頁 及び「護國之役回顧談」

尙、蔡鈔の最初の計畫は、廿三日に四川を襲い袁軍がその兵力を調える前に之れを占領し、廿日間この任務を完了した後、獨立宣布する豫定であつた。然るに豫定に先立つて決行したことは、軍事的には雲南軍にとつて不利な結果を與えることになつた。「當時蔡寫信給梁啓超說、宣布過遲、固有妨大局、宣布早、殊于軍事計畫大受影響。果然、後來雲南軍開到四川不久、北洋軍就源源不絕地調到四川前綫來、使雲南軍進展受到很大的阻力。」陶菊隱「前揭書」一五四頁

(81) 鄒魯「前揭書」一〇五—二頁

(82) 陶菊隱「前揭書」六五頁

(83) 右同 一五〇—二頁

(84) 「護國史稿」には「當校場誓師的那一天、昆明全體人民、不約同、結隊成羣、在街上遊行、高呼打倒 〃賣國賊袁世凱 擁護 〃共和民國 〃的口號、呼聲動地、經久不息。……人民繳納捐款的、爭先恐後、早晨一開門、就擁擠的來交、至晚不止。婦女們把警環首飾拿來抵交的很多、都是自動自願並沒有勉強叫他們出錢。……出兵以後前線催糧甚急、只好把教育停辦三個月、其他敬節堂養濟院都停了、抽湊餉銀、接濟前方、學生教職員及老少人民、毫無怨言、大家都忍痛急公。」とある。尙、スメドレー、一二三—五頁參照

(85) 前掲「辛亥革命史料」第六冊 雲南之部

(86) 陶菊隱「前揭書」一六〇頁

(87) 右同 一七九頁

(88) 金氏論文參照

(89) 陶菊隱「前揭書」一九二頁「廣東方面、除擁護力量外、還有各種不同性質的反袁力量、包括孫中山系的中華革命軍、國民黨右

翼陳炯明等的護國軍和進步黨系徐勳的護國軍。」

(90) 鄒魯「前揭書」一〇六—〇七頁

(91) 陶菊隱「前揭書」一九四頁

(92) 「護國史稿」所收「軍務院職員表」參照。

(93) 梁啓超の記す所に依れば、彼の軍務院設立の構想は天津に於ける最初の謀議の時からであつたという。「余與蔡君在天津密謀時、曾議俟雲貴兩廣獨立、觀形勢如何、即先組織一臨時政府、戴黎元洪爲總裁。」（國體戰爭躬歷談）

(94) 一説によれば、彼は軍務院を設立するや、自ら撫軍長に選舉される様に同志の者に裏面工作をさせたという。「廣東軍務院成立選舉撫軍長之前、派其弟子黃羣到滇運動進步黨系之任可澄、陳廷策等、以宜舉陸榮廷爲名、陸辭、則舉啓超。第二步則進行首撥組閣、副總統皆在其豫計中。因滇中將領反對、作罷（仍舉唐繼堯）。」（護國史稿）

(95) 平川氏「前揭書」四二—一頁

(96) 「盾鼻集」「致各都督各總司電」六月二十八日「若此機關久存、非惟我輩倡義本心不能自白、且恐有人假借名號、生事怙亂、將來反動之結果、轉助復辟派張目、此最可憂。」

「致岑都可令電」七月四日

「軍務院之撤、滇黔浙既主張、超亦謂現在實爲適當時機、不獨

爲大局計而已、即爲軍務院計、今各省各軍皆無見糧、捐借之路兩絕、非與政府協商、曷由接濟結束、而政府仰屋、亦同於我、終不能不乞靈外債、南北不統一、外債決無成立之望。論者或謂以此窘斃中央、自誇妙策、夫袁既倒、而必欲更窘斃黎段、是否爲國家之禍、且勿深論、曾亦思窘斃中央、需一月者米半月而我先已自窘斃耶。」

(47) 陶菊隱「前揭書」第三冊 一九頁

「但是梁啓超之流力求更早日實現南北和平、極力慫恿唐繼堯以撫軍長名義、于北京政府發表懲辦帝制禍首令的一天、宣布撤銷軍務院。唐繼堯事前未與軍務院各撫軍進行協商、獨斷地發出了這個通電、而軍務院各撫軍也都默不作聲、于是南北統一就告完成了。」

東洋史研究叢刊之三之二

羽田博士史學論文集 下卷 宗教篇
言語篇

A5 本文 六八八頁 上裝箱入
定價二〇〇圓 國內送料本會負擔

〔內容〕

回鶻文字考（未發表）回鶻文の佛典に就て 回鶻文の天地
八陽神呪經 回鶻譯本安慧の俱舍論實義疏 トルコ文華嚴
經の斷簡 新出波斯教殘經に就て 景教經典序聽迷詩所經
に就いて 景教經典志玄安樂經に就いて 大秦景教大聖通
眞歸法讚及び大秦景教宣元至本經殘卷について ル・コッ
ク氏著摩尼教遺文卷三 吐魯番出土回鶻文摩尼教徒祈願文
の斷簡 唐故三十姓可汗貴女阿那氏之墓誌 漢蕃對音十字
文の斷簡 契丹文字の新資料 北方民族の間に於ける巫に
就いて トルコ族と佛教等三十一篇。外に雜纂二十六篇を
含み、口繪圖版（十五葉）上下共通の佛文レジュメ（十七
頁）・索引（五十四頁）を附す。

右書御希望の方は當會まで御申込み下さい。

東洋史研究會